

白川部達夫著

『日本近世の村と百姓的世界』

渡辺尚志

本書は、白川部達夫氏が年来の研究成果をまとめられた論文集であり、一七・一八世紀を主要な対象としている。本書では、近世社会の歴史的基層を解明するために、そのもつとも基本的要素となる近世百姓の

所有と自由、そして社会結合のありようが、彼らが抱いた社会意識の側面から追究されている。

本書は、序章・終章と、本論部分の二編第六章とからなるが、I「百姓的世界の基層」の第一章「近世質地請戻し慣行と百姓高所持」では、質入・流地から何年経過しても元金を返済しさえすれば土地を請戻すことができるという無年季の質地請戻し慣行を検討対象とし、全国的に事例を収集したうえで、①この慣行は、小百姓の高所持の再生産をささえる不可欠の条件であり、質取側は幕末・維新时期においても、この慣行を拒否し自らの所持を確保する論理を十分形成しえなかつたこと、②この慣行は、

一七世紀末にかけて小農自立が進み百姓株式が形成されることを基本に、検地名請と結び付いて確立したこと、などを明らかにしている。本章は、中世とも近代とも違う近世固有の百姓の土地意識を解明した豊かな内容をもつものであり、私自身も本章の初出の時点（一九八六年）から非常に多くのことを学んできている。本章での到達点をふまえて、今後は、①中世から近世への百姓の土地意識の連続と変化をより明確に

するために、一七世紀における土地移動形態とそこに潜む意識とを解明すること、②世直しにおける土地意識のあり方を質地請戻し慣行との関連で明らかにすること、が課題となろう。

第二章「百姓的世界の成立と百姓結合」では、下総国古河藩領を対象に、一七世紀末から一八世紀初めにかけての百姓的世界の正当性と、その形成をささえた百姓結合の展開が検討され、①一七世紀末になると、小百姓の家の形成により村の家格秩序は平準化され、百姓仲間としての村の性格が強まったこと、②そのなかで、村役人に把握できない内通・内証などといわれた小百姓の私的な結合・寄合が成長し、これが百姓的世界の形成を下からささえていたこと、③百姓仲間が取り結ぶ社会結合の論理として、見継ぎ・見継がれる、頼み・頼まれるという関係があり、こうした結合を反映した頼み証文という文書様式があらわれたこと、などが指摘されている。なお、頼み証文の問題を白川部氏がさらに展開したものととして、「近世の百姓結合と社会意識」頼み証文の世界像——『日本史研究』三九二号、一九九五年）がある。

第三章「百姓的世界意識の基層——迷惑・我儘・私欲——」は、村方騒動文書にあらわれた非難文言を分析して、そこにおける百姓の正当性意識の展開を跡付けたもので、

①近世初期の迷惑・取込・非分といった文言から、一七世紀中葉になると我儘が非難文言の中心を占めるようになり、さらに一七世紀末から一八世紀初めになると、私欲文言が次第に重要性を増すようになったこと、②私欲文言の多用は、小百姓の家がその自律を前提に公と共を形成し、これに背くものを私欲と非難したことを示していること、③百姓的世界の公は村為など村の公として具体化しており、私欲はそこにまずあらわれたが、村の変容とともに万民の助けのためなどという、村をこえたより普遍的な場に広がっていったこと、などが指摘されている。近年公共性の問題は多くの研究者の注目を集めており、村・百姓の公と共の具体的内容と歴史的展開については、本章の成果をうけてさらに深められる必要がある。

II 百姓的世界の展開と社会結合、の第一章「元禄期の山野争論と村」では、常陸国西部の筑波郡太田村と小田村の山論を素

材に、①小田村は太田村に対して中世からの伝統的な鎌取りを行ったが、鎌取り勢は、地代官を勤めた有力百姓が中心となり、若者のほかに、家来・門屋・下人・下男などが多数参加する構成であったこと、②太田村の結集のあり方は、小田村と対照的に、頼み証文を作成して村中から合意を調達するという新しいかたちであり、その基礎には小百姓のイエの形成が一定程度進展し、百姓がもはや村中に埋没した存在ではなくなっているという事態が存在したこと、などが述べられている。

第二章「享保期における村落共同体と祭祀問題」は、常陸国西部農村を対象に、村落祭祀をめぐる村方騒動について分析したもので、①村レベルでは、念仏結衆の編成や神社遷宮の供奉順序などをめぐる抗争が、可能性として分村化の要素をはらみながら展開し、その背後には、新百姓・組子百姓の新たな台頭と、初期本百姓の系譜をもつ村役人層の後退とがあったこと、②村落の下部編成単位である「組」においても、この時期、初期本百姓の村落秩序の一定の変質がみられること、③同族団においては、廟所をめぐる争論が急速に展開し、それを

授)  
(A5判、三二八ページ、七二〇円、校倉書房、一九九四・一一刊)

通じて同族墓制から村落墓制への展開の可能性が切り開かれたこと、などが明らかにされている。

第三章「古河藩宝暦一揆の展開」では、宝暦九年(一七五九)に古河藩でおこった百姓一揆の経過を跡付け、一揆前後の村落の変化について、正徳寛延期における農民闘争が村役人層をも「百姓仲間」として包摂する惣百姓結合を強化する性格をもっていたのに対して、宝暦一揆の成功後は、村役人層と小前層との対立が激化しているき、村をこえた規模で検見入用などの諸掛り・村入用の監査体制の組織化がはかられた、としている。

総じて、本書は、Iの第一・三章のような全国的に事例を博搜しての立論と、その他の諸章のような北関東を中心とした丹念な地域研究とがうまく結合しており、土地意識、不正観念、頼み証文にみられるような社会結合のあり方など、近世の百姓的世界を考える上で核となる問題についての重要な提起がなされている。本書が広く読まれ、それを通じて近世村落史研究がさらに発展することを願ってやまない。

(わたなべ・たかし 一橋大学社会学部助教